尾崎紅葉　1867‐1903(慶応3‐明治36)　(おざきこうよう)

明治期の作家，俳人。江戸生れ。本名徳太郎。別号は十千万(とちまん)堂のほか初期に多い。家は代々の商家で，父は谷斎(こくさい)と号した牙彫(げぼり)の名人であり，素人幇間(ほうかん)でもある奇人であった。紅葉は幼時に母を亡くして後は，母方の実家で養育された。少年時から文筆を好み，大学予備門に入って，1885年，学友石橋思案や山田美妙らと文学結社硯友社(けんゆうしや)を興し，同人誌〈我楽多(がらくた)文庫〉を発行した。初めは戯作的な文章を書いたが，89年〈新著百種〉第1号の〈二人比丘尼色懺悔(ににんびくにいろざんげ)〉が出世作となり，同年末に坪内逍遥，幸田露伴とともに〈読売新聞〉に迎えられ，同社の新聞小説を書いて職業作家の地位を確立した。90年に東大中退。〈むき玉子〉(1891)，〈三人妻〉(1892)などの当代風俗小説によって人気を呼び，“読売の紅葉か，紅葉の読売か”とまで言われて文名を上げ，明治中期の最有力作家となる。古典や西洋文学の摂取，〈である〉調の言文一致体などにみられる文体の模索等により次々と試作して時代への適合に精進し，晩年には〈多情多恨〉(1896)，〈金色夜叉(こんじきやしや)〉(1897‐1902)の力作長編で満天下をわかせたが，健康を害して没した。次代の作家から，写実の浅薄さや通俗性が批判されたが，文学を芸術性と大衆性の両面において調和させ発展を期した意義は評価されねばならない。また作家の経済生活の確立に腐心し，小栗風葉や泉鏡花らの後進も育てた。秋声会の俳人で句集もある。〈泣いて行くウエルテルに会ふ朧(おぼろ)かな〉。

土佐 亨 (c) 1998 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.